

(第十七回春陽展 展評)

## 春陽会を觀る (上)

石井 柏亭

春陽会の創立者たる小杉放庵氏出さず、山本鼎、長谷川昇、山崎省三等諸氏が居なくなつて手不足の感あることを免れ<sup>まぬ</sup>ない。出品全体を通じて通俗性のないことを美点に挙げられないでもないが、鳥海青児氏の感化かと思える厚い汚い盛上げと暗晦<sup>あんかい</sup>な色調と、それから水谷清氏あたりの影響かも知れない粗暴な近代味とが横行して会場の空気を荒びたものにして居る。さうして陳列もよく考へられて居ない。例へば新沼杏一氏の《兵士の話》《アクロバット》の二点が第一室の中央の壁を占めて調和を破つて居るが、あの様な絵を会員達が賛成して居るのか知らぬ。

パレット・ナイフの使用も厚盛りも必ずしも悪いとは云はぬが、マチエールの美しさがなくては困る。又必要もなく効果のないやうな盛上げは意味をなさぬ。此流行は無知に基づく附加雷同の現象としか見えぬことを遺憾とする。

鳥海氏の《蘇州風景》二点の如きは、かなりの距離からすれば其処に樹あり家あり水あることは分り、或诗情も感じられないではないが、又地と天とに二分された其大きな明暗も単純でいいが、画は遠くと近くと両方で見えて美しくなければならぬと云ふ条件を持つて居る私などには、近づいて

はどうしてもパレットの絵具かすを塗りつけたとしか見えぬ描法に、辟易せざるを得ない。サロン・ドートンヌの会員でいつも巨大な灰色の画面を示して居たブーシェと云ふ画家のも大まかな厚盛りではあつたが、傍<sup>そば</sup>で見ても汚い訳ではなかつた。スゴンザツクのヘラ画きにても決して汚くはない。

中川一政氏の此頃の風景も大分厚盛りになつて来た。中々務めた描写であることは分るが、一見して引きつけられると云ふ画でもない。厚盛りから来る或重厚味はあるが、現象や季節感などが充分にあらはれて居ないので、出る可き筈の詩趣も出きらぬ形である。《牧の郷》の主山の或部分に用ひられた茶褐色が近い色であるために、距離を感じさせなかつたりすることも欠点になる。

一体春陽会にはもつと質実的な風景画があつたものだが、厚盛りの暗晦画に毒された今日、岩田栄之助氏其他大抵前の方がよかつたと云ふ感を起させる。小栗哲郎氏の《吾野晴日》も暗いには暗いが、枯木と常磐木のある小山と其前にならぶ黄土壁の農家とにやや好感がもてた。

横堀角次郎氏の風景二点もいい出来とは云はれない。川端弥之助氏の画には華やかなのと地味なのと二通りある。田圃に積糞が立ち列び、うしろに山のある《城南早春》は地味な方だが、《温室内》などよりも、私は却つて此方を好む。

『読売新聞』 昭和十四年五月四日付

(第十七回春陽展 展評)

## 春陽会を観る (下)

石井 柏亭

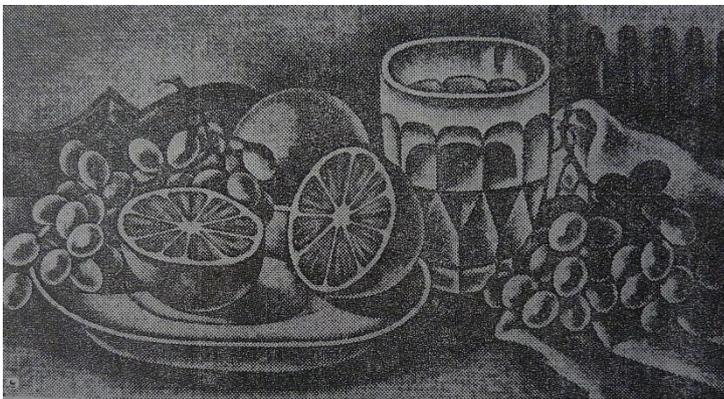
足立源一郎氏の北支諸作はアクサンが足らなくて、色にも筆にも単調を思はせる。《大同石仏》のなかでは第二十窟の石仏を横画にした比較的大きからぬものがよい。《谷川嶽カタズミ尾根》の雪の山は手に入った題材であるだけに無難である。

木村荘八、小穴隆一、小林徳三郎諸氏が先づ此会らしいものを見せて居る。木村氏の戦争映画を写して居る画の画稿にも面白い作意は窺はれるが、青、紅黄を背景とした三枚の「椿」は中々凝つたもので、マチエールも綺麗である。ただあの深過ぎる額縁の好みはどう云ふものであらう。屋内に掲げられる場合飛出して変になりはしないかと危ぶまれる。

小穴氏の《花》AB二図とも装飾的に美しく、《坤画館》《化粧》二点の支那ものにも其才気は見える。小林氏の《絵を描く子供》《横臥読書》二点は身辺の親しい題材を素朴に而も大胆に描いて居る処がよい。人の顔が大きくなつたりする所に幾分下手趣味も感じられるが、色は明朗である。

故福井謙三氏の滞欧諸作では《婦人像》《読書》など穩富なもので、質のよさが感じられ、其夭折が惜しまれる。

中川一政氏の「石田三成」、石井鶴三氏の「宮本武蔵」等の挿絵の幾組と、



長谷川潔 《オレンジと葡萄》 1932年

在仏長谷川潔氏の銅版諸作とが収められて居る第八室は相当見ごたへがある。長谷川氏の銅版はビュランのとポアント・セーシュのものと同様を具へて立派である。ビュランとポアント・セーシュとの区別など一般観客には分りにくいかも知れぬが、極めて清澄で古典趣味と近代性をうまく兼ねて居る。アクア・タントでレースを白抜きにしたなど、丹念なものである。これは彩画の傍らの手すさびでは出来ない芸である。ただ私の好みとしてはマニール・ノアールに賛意を表しにくい。

野崎新右衛門氏の石版にも特色はあるが少しく朦朧に過ぎ、賞を得て会友となつた前田藤四郎氏の琉球木版のなかでは《紅形（A、B）》のAが一番優れて居る。

故人倉田白羊氏の遺作が七十余点<sup>なほ</sup>列べられて居り、信州上田在に定住して克明に周辺の自然を描写することに終始した其生涯が偲ばれる。曾て院展洋画部に出た《冬》の大作を久しぶりに見た。惜しいことに大分損じてゐるが、これは時代色がついた所為か思ひの外落着いて見へ、又硬さも少ない。上田の風景では、其画室に近い崖を画いた《曇り日》と《風景》と、故人の写真を挟んで掲げられた二点が佳い。

『読売新聞』 昭和十四年五月五日付

石井 柏亭 (いしい はくてい、明治十五年(一八八二年)―昭和三十三年(一九五八年) 本名・満吉。石井鶴三は実弟。

日本画家・石井鼎湖(いしい ていこ)の長男として東京下谷区(現在の台東区)で生まれる。印刷局の彫版の見習をしながら、日本美術協会や青年絵画共進会に作品を出品。柏亭と号する。明治三十年浅井忠に師事し油絵を学ぶ。結城素明らが結成した无声会に参加、新日本画運動に加わる。中村不折にも師事し太平洋画会に参加す

る。明治三十七年に東京美術学校洋画科に入学するが、眼疾のため中退。雑誌『明星』に挿絵、詩作を発表する。

明治四十年に山本鼎とともに美術雑誌『方寸』を創刊する。近代創作版画運動に加わる。北原白秋ら文学者と「パンの会」を結成する。明治四十三年に外遊。帰国後有島生馬らとともに二科会を結成する。東京帝国大学工学部講師を務める。文化学院に招かれて教鞭を執る。昭和三年にフランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を授賞される。『中央美術』創刊に携わる。昭和十年に帝国美術院会員となり二科会を辞す。昭和十一年に一水会を結成。戦中は信州に疎開。戦後、信州美術会の会長となる。

1939 4, 5 May

昭和 14 年 第 17 回春陽展 展評 石井柏亭「春陽会を観る」(上)(下) 読売新聞